

江戸城本丸御殿の「奥」空間再論

——吉宗・家治・家慶期の変化を中心に——

深井雅海

はじめに

- 一 八代將軍吉宗期の「奥」空間
- 二 一〇代將軍家治期の「奥」空間
- 三 一二代將軍家慶期の当初計画に見る「奥」空間
- 四 同時期に竣工された「奥」空間
おわりに

はじめに

江戸城本丸御殿の「奥」空間は、「表」と異なり、將軍の個性や政治状況に応じ、將軍の代ごとに改造されていたことに特徴がある。すでに筆者は、「江戸城本丸御殿図」に見る中奥・表向・大奥―その変遷を中心に―⁽¹⁾（以下、前稿と略す）において、御殿図を基にその構造の変化を考察したが、なお不明な点が多かった。近年、五代將軍綱吉時代から七代將軍家継時代までの「奥」については、別稿⁽²⁾によって補足説明を行ったが、八代

江戸城本丸御殿の「奥」空間再論

將軍吉宗時代以降の「奥」は前稿のままであった。

そこで本稿では、新たに発掘した御殿図を加えつつ、吉宗時代以降の「奥」構造の変化について考察したい。

なお、考証の過程で、前稿と重複する部分があることを予めお断りしておく。

一 八代將軍吉宗期の「奥」空間

八代將軍吉宗は、五七号所収論文で考証したごとく、將軍家相統後享保一二年（一七二七）の新築まで、七代將軍家継時代の休息所をそのまま受け継ぎ、「御本丸御表方惣絵図」（東京都立中央図書館特別文庫室蔵）の改築図に見える「東御小座敷御上段」（同上論文図3の④）に居住したものと思われる。したがって、その他の「奥」空間についても、部屋名は変えたかもしれないが、構造的には家継時代の状況をそのまま維持した可能性が高い。

ところが、享保一二年三月に休息所を造営することになり、同年五月に

普請が終わり、六月一日、吉宗は新しい休息所に移徙した。⁽³⁾この新築後の御殿図が、図1の「御本丸表向絵図」(東京都立中央図書館特別文庫室蔵、整理番号「以下同じ」六一六三八)と推定される。これは、「表」の納戸口⁽¹⁾にある老中(戸田山城守・水野和泉守・松平左近将監・酒井讃岐守・安藤対馬守)、西丸側用人(石川近江守)、若年寄(太田備中守・水野壹岐守・本多伊予守)、西丸若年寄(松平能登守)の下部屋に記された人名から判明する。すなわち彼らの在職期間により、この御殿図は、享保一三年一〇月から同一四年一〇月頃の状況を示すものと見られる。したがって、吉宗が休息所を新築した直後の御殿図ということになる。

この図によると、將軍の休息所として、「御座之間」⁽²⁾の右側に、「御休息」⁽³⁾と「御小座敷」⁽⁴⁾が復活している。またその側に、將軍側近役の「御小性詰所」⁽⁵⁾と「御小納戸詰所」⁽⁶⁾が見える。「奥」の中心部にある「御小性衆部屋」二部屋⁽⁷⁾は控室と見られる。

なお、注意すべきは、その「奥」の中心部分である。「御医師衆」⁽⁸⁾・「女中詰所」⁽⁹⁾をはじめ、部屋の名称・構造ともに、家継時代の御殿図(五七号所収論文の図3)とほぼ同内容であり、その状況を踏襲している。したがって、この部分は享保中期の状況を反映していない可能性が高い。

すると、別に享保中期の状況を示す御殿図が必要となる。管見の限り、この時期の御殿図は二点見られる。そのうちの一点が、図2の「江戸城奥向絵図」(静嘉堂文庫蔵、七七七四)である。本稿では、この図のうち、將軍の生活空間部分を図2-1、將軍側近役の詰所空間を図2-2と二つに分けて掲載した。この図面で時期が特定できる箇所は、図2-1「巨勢大和守」⁽¹⁾とある部分である。巨勢大和守利啓は、吉宗の生母浄円院の弟の子、つまり吉宗の従兄弟にあたる人物である。利啓は、享保四年六月に父由利

の家督を継いで五〇〇石を知行して奥詰となり、同六年閏七月に従五位下大和守に叙任された。そして、吉宗が隠居した延享二年(一七四五)九月、吉宗に従って西丸に移り、翌一〇月西丸側衆となった。⁽⁴⁾したがってこの図は、図2-1「御座之間」⁽²⁾の右側に、「御休息」⁽³⁾と「御小座敷」⁽⁴⁾が記載されていることから、將軍の休息所が復活した享保二年六月より延享二年九月までの間の図面ということになる。

まず、図1の「御本丸表向絵図」と比較してみよう。⑤の「御小性詰所」は、図2-1「江戸城奥向絵図」では空欄となり、⑥の「御小納戸詰所」は「御囲炉裏之間」に変わっている。⑦の「御小性衆部屋」二部屋は同じ場所にみられる。とくに注意すべきは、⑧の「御医師衆」と⑨の「女中詰所」である。図2-1では、「御弓部屋」⁽⁸⁾と「御物置」⁽⁹⁾に変わり、家継時代に設けられた「女中詰所」は、吉宗時代に消滅したことを確認できる。また、⑩の「御膳立」は「笹之間」に、⑪の「新御小納戸」は「御書物部屋」に変わっている。後者は吉宗専用の書庫である。⁽⁵⁾

つぎに、図2-2により、將軍側近役と奥向衆下部屋の状況を見よう。吉宗は、家継時代の側用人を一旦廃止し、旗本役の側衆の中に御用取次を新設して、腹心の有馬氏倫と加納久通を任命した。これを契機に、一般の側衆は平御側もしくは平側衆と称した。⁽⁶⁾⑫・⑬とともに「御側衆部屋」と記されるが、⑫が平御側、⑬が御用取次の部屋と思われる。⑬は、家継時代には側用人の部屋であったが、これを廃止し、代わりに設けた御用取次の詰所に替えたわけである。その左側に、「御小納戸衆部屋」⁽¹⁴⁾が二部屋見える。廊下を挟んで向かいに、すでに指摘した「御小性衆部屋」⁽⁷⁾が設けられているので、この辺りに將軍側近役の部屋が集中していたことになる。

奥向衆下部屋には、「御医師衆」⁽¹⁵⁾・「御用部屋坊主」⁽¹⁶⁾・「河合久円」⁽¹⁷⁾・「奥坊主」⁽¹⁸⁾などの部屋が設けられていた。「御医師衆」は、將軍の侍医である奥医師の詰所と思われる。「御用部屋坊主」は、老中・若年寄の執務室である「御用部屋」⁽¹⁹⁾付きの坊主である。「河合久円」は同朋格奥詰で、坊主の一人であるが、吉宗の特別の命を受けて隱密を務めていたという。個室を与えられたのも、その役目のためと思われる。⁽⁷⁾「奥坊主」は、「奥」で雑役を務めた坊主のことである。

吉宗中期の状況を示すもう一点の御殿図は、図3の「東武御本丸絵図」(徳川林政史研究所蔵、旧蓬左図物甲四三五、口絵1参照)である。ただし、この図の「表」部分は、「御小納戸口」にある老中(酒井雅楽頭・堀田相模守・本田「多」・伯耆守・松平右近將監)、西丸老中(西尾隱岐守)、若年寄(本多伊与「予」守・水野老岐守・板倉佐渡守)、西丸若年寄(堀式部少輔・加納遠江守・堀田加賀守・戸田淡路守)の下部屋に記された人名の在職期間から、延享四年(二七四七)九月より寛延元年(二七四八)八―一〇月まで、つまり家重時代初期の御殿図と推定される。⁽⁸⁾しかし「奥」空間については、後述することく、吉宗時代中期の状況を示す。

では、図2の「江戸城奥向絵図」と比較してみよう。詳しい説明は省略するが、御座之間・御休息・御小座敷などの將軍の生活空間、「奥」の中心部、奥向衆下部屋など、その構造・部屋名とも、ほぼ同内容である。異なっているのは、図2-1の①「巨勢大和守」が図3では「巨瀬(勢)縫殿・有馬六左衛門」とあること、図2-2では空欄であった部屋に図3では「渋谷隱岐守」⁽²⁾と記されていることである。

巨勢縫殿頭至信は、図2-1に見える巨勢大和守同様、將軍吉宗の生母浄円院の弟の子で、吉宗の従兄弟にあたる人物であり、將軍側近役の小納

戸を務めていた。知行は二〇〇石(のち五〇〇石)である。有馬六左衛門氏久は、御用取次・有馬氏倫の跡継ぎで、世子のまま小納戸を務めていた。禄は三〇〇俵である。小納戸は、人員も四〇人前後と多く、部屋も図3に見えるごとく大部屋であるが、巨勢・有馬両名は、それぞれの出自を考慮されて個室を与えられたものと思われる。渋谷隱岐守良信は、「表」勤務の小性組番頭の一人で、知行は三〇〇石である。しかし彼は、「近侍」Ⅱ將軍側近も兼帯していたので、「奥」に部屋を与えられたものと考えられる。ただし、側近としての具体的な役割は今後の課題である。以上の三人の官職名や通称から鑑みると、図3は享保一五年(一七三〇)―一六年度の状況を示すものと推測される。⁽⁹⁾

なお、図2-1の①巨勢大和守の部屋が、なぜ巨勢縫殿頭・有馬六左衛門の部屋に変わったのか、その時期は何時なのか、巨勢大和守はどこに移ったのか、など不明な点が多い。これらについては今後の課題にする他ない。

図4の「江戸城本丸絵図」(東京都立中央図書館特別文庫室蔵、六一七二七九)は、家重政権成立直後の御殿図と見られる。すなわち、「表」の老中口(納戸口、①)にある老中などの下部屋に記された人名(老中(松平右京大夫・本多中務大輔・酒井雅楽頭・松平能登守)、西丸老中(西尾隱岐守)、若年寄(本多伊予守・水野老岐守・板倉佐渡守)、西丸若年寄(堀式部少輔・加納遠江守・戸田淡路守)、大納言(家治)付き若年寄(堀田加賀守)から、延享二年(二七四五)九月より一二月頃の御殿図となる。しかし「奥」空間については、②・③の空欄を除き、図1の「御本丸表向絵図」の「奥」とほぼ同じ内容である。したがってこの絵図も、「奥」の中心部分は、当時の状況を反映していない可能性が高いので、注意が必要である。

二 一〇代將軍家治期の「奥」空間

家治期の「奥」空間については、図5の「柳宮略図」(徳川林政史研究所蔵、続林絵図二〇一〇、口絵2参照)により考察したい。この絵図には袋がついており、そこには、「宝暦甲申之春 武陵散人謹写、寛政戊午之秋 拾翠楼写蔵」との記載が見られる。これにより、宝暦一四年(明和元年、一七六四)の春に「武陵散人」が写し、それを寛政一〇年(一七九八)の秋に「拾翠楼」が写したうえ所蔵していた図であることがわかる。武陵散人・拾翠楼とも、管見の限り、いかなる人物なのか不明である。武陵散人が写したのが宝暦一四年とすると、この絵図はそれ以前の図ということになる。しかし、「表」の納戸口にある老中・若年寄などの下部屋に記された人名から、もう少し後の状況を示す図であることが判明する。

「奥」空間について考察する前に、まずいつの時期の御殿図か明らかにしたい。図6は下部屋付近の拡大図である。納戸口には、門を入って右に老中、左に西丸老中・側用人・若年寄・西丸若年寄・側衆の下部屋が設けられていた。側衆については、人名の記載がない。官職名によると、老中は松平右近将監武元・松平右京大夫輝高・松平周防守康福・阿部伊予守正右、西丸(家基付き)老中は秋元但馬守涼朝、側用人は板倉佐渡守勝清、若年寄は小出信濃守英持・松平摂津守忠恒・水野沓岐守忠見・酒井石見守忠休、西丸若年寄は鳥居伊賀守忠意・酒井飛騨守忠香である。役職ごとに、奥の方から先任順に個室を与えられている。それぞれの在職期間から見ると、この御殿図は明和二年一二月から同四年六月頃の御殿図ということになる。

つぎに、側衆の下部屋についてみよう。先述の通り側衆には、御用取次と平御側の二種類がある。門の左右に見える①②③の部屋が平御側、門を入った所にある④と⑤が御用取次の部屋と思われる。①には、「稲葉・小笠原・金田」と記される。彼らは、平御側の稲葉越中守正明・小笠原若狭守信喜・金田遠江守正甫の三名である。^⑩ 明和三年の「明和武鑑」^⑪によると、以上の三名の他に、松平肥前守忠根・朽木大隅守紀綱・大久保下野守忠恕の三名が平御側に在職している。したがって、隣室の②が彼らの下部屋と推測される。また③には、「水上・大久保・佐野」と記される。これは、同じ「明和武鑑」によると、西丸(家基)付きの側衆、水上美濃守興正・大久保対馬守教明・佐野右兵衛尉茂承である。^⑫

一方『柳宮補任』^⑬によると、明和三年当時の御用取次は、田沼主殿頭意次・松平因幡守康郷・水野豊後守忠友の三名であり、田沼は寛延四年(宝暦元年、一七五二)、松平と水野は宝暦一〇年の就任である。下部屋は奥の方から先任順に与えられるという原則からすると、記載はないものの、④が田沼、⑤が松平・水野の下部屋ということになる。

側衆一二名の在職期間から見ると、図5は明和二年一月から同三年五月頃の御殿図となる。先述の老中・若年寄の在職期間と合わせ、おおむね明和三年(一七六六)前半の状況を示す御殿図と考えておきたい。

なお、下部屋の近くに「三奉行談部屋」(⑥)が設けられていることが注目される。管見の限り、こうした部屋が見える御殿図は他には見あたらない。これは全く推測の域を出ないが、この部屋は、御用取次の田沼意次が三奉行と談合する部屋ではなからうか。田沼は、宝暦八年(一七五八)九月から老中格に就任する明和六年(一七六九)八月までの一一年間、將軍側近役人(御用取次・側用人)でありながら、「評定所一座並」の資格を与えられ

て評定所に出席していた。⁽¹⁴⁾当初は評定所に向いて寺社・町・勘定の三奉行と協議していたが、田沼は將軍側近としての実務が多忙となり、御殿の下部屋近くに、かかる協議場所を設けた可能性も考えられる。勿論、このことは今後の検証が必要である。

では、明和三年前半の状況を示す「柳営略図」により、家治期の「奥」空間について見よう。ただし、この図は「略図」であるので、「奥」の全体が記載されているわけではない。とくに、將軍の生活空間は削除されているが、管見の限り、他に家治期の御殿図が見あたらないため、吉宗期の図と比較しながらその後の変化を見てみよう。

図7が吉宗時代、図8が家治時代の図である。両図を比較してまず目につく点は、①の平御側の部屋は以前のままであるが、②の御用取次の部屋は側用人の部屋に、③の「御書物部屋」は「御取次御側衆」、つまり御用取次の部屋に改められていることである。このことは、つぎの「有徳院殿御実紀付録卷十」の記事と符合する。⁽¹⁵⁾

奥の書房にも群臣編集の書をあつめて、御勘考の用にそなへたまふ、
(中略)宝暦の頃より此こと廃せられて、今は御側申次(御用取次)の衆伺公して、会議する所となれり

すなわち、吉宗のときに設けた「書房」＝書物部屋は、宝暦の頃に廃止され、御用取次の部屋になったことがわかる。「宝暦の頃」⁽¹⁶⁾廃止されたとの文言から、大岡忠光が側用人に任命された宝暦六年頃、御用取次の部屋が大岡の詰所となり、同職の部屋は書物部屋を廃止して設置されたものと推測される。したがって、図8の明和三年前半期の図では、②が側用人の板倉勝清、③が御用取次の田沼意次・松平康郷・水野忠友の執務室ということになる。

なお、明和三年当時は、いわゆる田沼時代にあたり、御用取次の田沼意次が権勢をふるっていた。⁽¹⁷⁾ただし、職制上から見れば、当時の將軍側近役の第一人者は側用人の板倉勝清である。しかし、『よしの冊子』⁽¹⁸⁾下巻に、「御側御用人と申候ても(中略)板倉佐渡殿の形にて、只坊主を呼で時計の時を聞せる計であらふ」と記されているように、当時彼には將軍側近役としての実務権限はほとんどないものと見られていたようである。

ついで、將軍の身の回りの世話をする小納戸・小性などの部屋をみよう。④の小納戸、⑤の小性の部屋とも、ほぼ同じ場所に見られる。異なっているのは、小性の部屋が二部屋から一部屋となり、「頭取」⁽⁷⁾の部屋が設けられたこと、小納戸にも「頭取」⁽⁶⁾の部屋が設けられたことである。明和三年の「明和武鑑」によると、小性(扈從)頭取は菅沼上総介(政勝)・大岡主水正(忠近)・天野阿波守(忠邦)・三宅采女正(康俱)・横田筑後守(準松)の五名、小性は一五名、小納戸頭取は松下隠岐守(昭永)・曾我丹後守(助榮)・伊藤志摩守(忠勤)・白須甲斐守(政賢)の四名、小納戸は五三名である。⁽¹⁹⁾彼らは交替でそれぞれの部屋に詰め、將軍の御休息之間や御小座敷に出仕して奉公したものとされる。

つぎに、奥向衆下部屋の变化について見よう。⑧は、奥医師の部屋と同じである。⑨は、図7では御用部屋坊主の部屋であったが、図8では文字が潰れて不明である。⑩は、同朋格奥詰の河合久円(の部屋であったが、図8では「ヤフ田」と記されている。これは、御休息御庭之者支配の薮田助次郎が佳の部屋と思われる。薮田家は、助次郎の祖父助八長矩が享保元年に將軍吉宗から奥向庭役に取り立てられ、同八年御庭御掃除者支配(のちの御休息御庭之者支配)に任命されて以来、三代にわたり同職を務める家柄である。⁽²⁰⁾⑪は、図7では「口ノ世話役」の部屋であったが、図8では「肝

煎・口奥」とある。「口奥」は時計之間坊主のことである。したがって「肝煎」は、御用取次の秘書役を務める時計之間肝煎坊主のことと考えられる。^⑫の「御小道具方(役)」と^⑬の奥坊主部屋は両図とも同じである。^⑭は、図7では「小細工方」、図8では「御手大工」と見える。^⑮は、六(陸)尺部屋で同じである。

なお、明和二年八月に、幕府は將軍の休息所の修理を行っている。⁽²¹⁾この修理が、將軍の休息所以外にも及んだのか、詳細は明らかでないため、翌三年前半期の状況を示す図8にどの程度反映されているのかは不明である。

三 一二代將軍家慶期の当初計画に見る「奥」空間

本丸御殿は、天保一五年(弘化元年、一八四四)五月一〇日に発生した火災により焼失したため、幕府は早速造宮に着手し、將軍家慶は翌弘化二年二月二八日、新築なった本丸御殿に移徙した。⁽²²⁾図9は、老中土井大炊頭利位を惣奉行とする、当初に計画された「江戸城御本丸御表御中奥御殿向惣絵図」(東京都立中央図書館特別文庫室蔵、六一六一〇)である。ここでは、將軍の生活空間と側近の詰所空間に分けて、吉宗・家治時代からの変化を見よう。

家治期の「柳営略図」には將軍の生活空間は記されていないので、同空間については、吉宗期の御殿図と比較してみよう。図10は吉宗期、図11は家慶期の將軍の生活空間を示す。①の御座之間・②の御休息・③の御小座敷・④の能舞台・⑤の囲炉裏之間・⑥の御湯殿・⑦の御小納戸など、位置関係を含め基本構造は両図とも同じである。しかし、異なっている部分も

ある。まず、御小座敷の下にあった將軍専用の便所⁽⁸⁾は、御休息之間の左の「萩之御廊下」の上に移された。能舞台の左に設けてあった「御弓部屋」⁽⁹⁾は、能舞台の下に移された。また、図10では記載のない腰物(刀剣)部屋(御弓部屋の右隣にあった可能性もある)もその右隣に見える。御座之間の左に見える「笹之間」⁽¹⁰⁾は、「御膳建」に変わっている。

新しく設けられた部屋もある。御小座敷下の中庭に設置された「八畳之間」と「八畳之間」⁽¹¹⁾である。その下には、將軍が乗る駕籠を置いておく「オカコタイ(御駕籠台)」⁽¹²⁾が見える。さらに注意すべきは、能舞台の下に設けられた「御鈴廊下」⁽¹³⁾である。この「下御鈴廊下」は、小粥祐子氏によると、享保一七年(一七三二)に吉宗が四男の小五郎(当時一二歳を「奥」に居住させるため、「表住居」＝「新御座敷」を作った際に新設したものであるという。しかし、享保期と推定される御殿図(図10)には「御新座敷」⁽¹⁴⁾は見えるものの、下御鈴廊下は記載されていない。⁽²⁴⁾

つぎに、將軍側近役の詰所空間の変化を見よう。図12は家治期、図13は家慶期の状況を示す。①の平御側・②の側用人の部屋とも、同じ場所に設けられている。注目すべきは、家慶期の図13には、側用人部屋⁽²⁾の右側に「御勘定所」⁽³⁾が設置されていることである。通常、幕府の財政を司る上勘定所は、「表」の納戸口を入った右側に設けられている。⁽²⁵⁾この図のように、「奥」空間にも勘定所が記載される御殿図は、管見の限り他には見あたらない。

では、なぜ弘化期に「奥」に勘定所が設置されたのであろうか。これは、側用人の堀大和守親霽が、老中の阿部伊勢守正弘とともに、月番で勝手掛を務めていたためと思われる。堀は天保一二年七月一日に側用人に就任し、弘化元年七月二二日勝手掛に任命され、翌二年四月八日同掛を免ぜ

られ、四月二九日に側用人を退任した。⁽²⁶⁾このように、「奥」役人の側用人が勝手掛を兼ねる人事は、それまでに、天明元年（二七八）九月から同五年正月まで在任の水野出羽守忠友、寛政二年（一七九〇）四月から同五年一月まで在任の本多弾正大弼忠壽、文政元年（一八一八）二月から同年八月まで在任の水野出羽守忠成の三名が見られる。⁽²⁷⁾しかし、それぞれの期間に、「奥」空間に勘定所が設けられていたかどうかについては、同時期の御殿図が見あたらないため不明である。

④の御用取次の部屋は、図13では「御側衆御談へヤ」へと変わっている。これにより、御用取次の執務室は、御側衆御談^{だん}部屋と称されるようになったことがわかる。弘化二年二月当時の御用取次は、松平筑後守正名・本郷丹後守泰固・岡野出羽守知英の三名である。⁽²⁸⁾⑤の小納戸二部屋は、図13でも同じ場所にみられる。ただし⑥の小性や小性頭取・小納戸頭取の部屋は、図13では同じ場所にみられない。これは、二階に設けられたためと思われる。⁽²⁹⁾弘化二年の「弘化武鑑」によると、小性は頭取三名を含め二八名、小納戸は頭取四名を含め一一五名である。⁽³⁰⁾

ついで、奥向衆下部屋の変化を見よう。⑦の奥医師の部屋は、図13には見あたらない。同役の部屋は、小性と同じく二階に設けられたものと考えられる。⁽³¹⁾⑧は「ヤフ田（藪田）」という御休息御庭之者支配を務める個人名であったが、図13では「庭方」という職名に変化している。なお、弘化二年の「弘化武鑑」によると、当時の御休息御庭之者支配は、川村新六・和多田金七郎の両名である。⁽³²⁾⑨の時計之間肝煎坊主の部屋は、図13では「肝煎」とのみ記される。⑩の小道具役部屋は同じである。⑪の奥坊主の部屋は、「奥坊主頭」と「奥坊主へヤ」に分かれた。⑫の御手大工は、御手水方・物書役が変わった。⑬の陸（六）尺頭・六尺部屋は同じである。

四 同時期に竣工された「奥」空間

天保一五年五月一三日に任命された、本丸普請惣奉行の土井大炊頭利位は病により免職となったため、六月一三日に老中阿部伊勢守正弘がその職務を引き継いだ。また、本丸普請御用掛の勘定奉行も、戸川播磨守安清・榊原主計頭忠義両名から、石河土佐守政平・松平河内守近直に変わった。⁽³³⁾

この交代がどの程度影響を与えたのか、あるいは將軍の意向によるものか不明であるが、土井利位担当の当初計画から、普請に変更が加えられた。その変更後の御殿図が、「大棟梁甲良若狭扣」の「江戸御本丸御表御中奥御殿向御櫓御多門共総絵図」⁽³⁴⁾（東京都立中央図書館特別文庫室蔵、六一六一四）である。しかし、この御殿図は不鮮明な所もあるので、ほぼ同じ内容でさらに詳細な、「御本丸中奥（奥）絵図」⁽³⁵⁾（東京都立中央図書館特別文庫室蔵、六一六三一二）によって、当初の計画よりどこが変わったのか、見てみよう。図14はその全体図であるが、將軍の生活空間と側近の詰所空間に分けて、その変化を見よう。

図15は計画図（普請惣奉行・土井利位）、図16は竣工期（同・阿部正弘）の將軍の生活空間を示す。①の御座之間・②の便所・③の萩之廊下・④の御休息・⑤の御小座敷・⑥の御駕籠台・⑦の御湯殿・⑧の能舞台・⑨の御腰物部屋・⑩の御弓部屋は、構造・名称とも、ほぼ同じである。名称が異なっているのは、⑪と⑫である。⑪は八畳之間・拾畳之間が鷹之間・二ノ間に、⑫は上御納戸が御召方役所が変わっている。また、図16は図15に比べ、⑬の御手水部屋や⑭の「奥之番」の詰所がより詳細にわかる。奥之番は小納戸の掛りの一つで、「奥」と「大奥」の境である「上ノ御錠口」

(15)・「下ノ御錠口」(16)の管理を行っていた。⁽³⁶⁾

図15と図16の決定的な違いは、図16では御駕籠台の上に、「楓の間」(17)・「御用之間」(18)・「双飛亭」(19)が増築されていることである。⁽³⁷⁾これらの部屋については、永島今四郎・太田賛雄『千代田城大奥』下巻「付録」の「楓の間并御用の間」の項に、つぎのように記されている。⁽³⁸⁾長文ではあるが、部屋の役割がわかるので紹介しよう。

御小座敷より渡り廊下の続きに楓の間と云る八畳二間の座敷あり、(中略)此二間を御作事方にては菊の御台と唱へ、奥にては楓の間と云、此の続きに御茶室あり、双雀(双飛亭と名く、是は山里の御庭より移せしものにて、四畳半一間水屋付なり、

さて此に緊要なるお座敷こそあれ、楓の間の後に四畳半許りの小座敷にて三方入側つきなり、之を御用の間と云、御作事方にては何とも唱へなし、其故にや絵図面にも座敷の名は記さず、抑も此一間は將軍自ら政務を扱ふ処にて、一個の簞笥を常備し、其内には將軍自筆の書類、評定所目安箱より出したる老中の失政を論議せし書面などあり、また諸大名・寺院などへ下さるべき御判物ども総て此一室に在り、將軍は折ふし御小姓(小性)頭取と共に此室に入りて彼の大高檀紙へ花押をかき、また朱印を捺せなどす、されば此処へは小姓も立入る事なく、況して老中・若年寄杯一切立入る能はず、扱て將軍家より出す御墨付と称するもの、文面は奥御祐筆にて認め、御小姓頭取へ差出し、此室の簞笥に納め、將軍自ら花押を据えるなり、(中略)併し此室内の事は、幕府時代にて最も深秘の事なれば、近習の人と雖も知る者は最も稀なり

すなわち、楓の間は「表」の役職である作事方では「菊の御台」と唱え

たという。実際、先述した「江戸御本丸御表御中奥御殿向御櫓御多門共絵図」では、この部屋は「菊之御茶室」と記されている。また御用之間のことは、「御作事方にては何とも唱へなし」とあるごとく、同絵図には部屋名は記載されていない。してみると、図16は「奥」で作成された図面ということになる。

ことに御用之間は、「近習の人と雖も知る者は最も稀なり」とあるように、將軍の隠し部屋であった。この部屋は、將軍が自ら政務を扱う場所であり、ここで判物や御墨付に花押を書いたり、小性頭取に朱印を押せたりしたという。また、部屋常備の簞笥には、將軍自筆の書類や目安箱に入っていた訴状なども保管されていたという。双飛亭は茶室である。

図15・図16に見える御休息(4)・御小座敷(5)が通常の居間とされているが、幕末に小性頭取を務めた坪内定益・小性を務めた松浦信寔は、『旧事諮問録』の中で、「御休息というのは、中奥(奥)のうちの表の部で、御休息になる所ではありません。つまり表の御居間であります。(もつとも、御寝はここにあります。〔竹本補〕と述べる。⁽³⁹⁾一方、『千代田城大奥』下巻では、「楓の間」「鷹の間」「双雀(双飛亭)などは、將軍心のまゝに住まはせらるゝ処にて、御小姓の外立入ること叶はず」と記す。⁽⁴⁰⁾つまり、二代將軍家慶時代、「表の居間」の奥に、「奥の居間」とでもいうべき楓の間・鷹の間・双飛亭や、隠し部屋(御用之間)が設けられたといえよう。

なお、「奥」で作成された図16には、「穴道(抜け穴道)」「(20)の入口が記載されていることも注目される。また、図15に見える「奥」勘定所(21)が、図16では空欄になっていることにも注意すべきである。これは、勝手掛側用人であった堀親審が、弘化二年四月八日に免職になり、同勘定所が廃止されたためと思われる。したがって、図16はそれ以降、双飛亭が設置され

た同年五月以降の状況を示す御殿図であることを物語る。

つぎに、將軍側近役の詰所空間の変化をみよう。図17は計画期、図18は竣工期の状況を示す。①の平御側、②の側用人、③の御用取次（談部屋）とも、同じ場所にみられる。図18の平御側の部屋が「泊方部屋」と記されるのは、平御側は三日に一回の宿直があるからである。⁽⁴¹⁾また御用取次の談部屋は、図17に比べ、部屋の状況が詳細である。下ノ口の左に、「口奥坊主」と「六尺」の詰所が見える。口奥坊主は、御用取次の秘書役を務める時計之間肝煎坊主のことである。六尺は、茶の提供などの雑事を処理した。

④の小納戸の西部屋・東部屋とも同じである。図18の⑤「家老」は、田安・一橋・清水の御三卿家老の詰所と考えられる。御三卿は、將軍の家族同様に扱われ、その家政は御用取次の管掌をうけたので、家老の詰所も「奥」に設けられたのであろう。

ついで、奥向衆下部屋の状況を見よう。⑥の御休息御庭之者支配、⑦の奥坊主組頭、⑧の時計之間肝煎坊主、⑨の小道具役、⑩の奥坊主、⑪の（物書役・手水方）、⑫の六尺部屋とも、名称に若干の違いがあるものの、両図とも場所と同じである。

なお本丸御殿は、安政六年（一八五九）一〇月一七日、中之口辺より出火して焼失したため、再建が行われ、一四代將軍家茂は万延元年（一八六〇）一月九日に新築なった本丸御殿に移徙した。⁽⁴²⁾そのとき建築された御殿の図面が、「江戸城御本丸万延度御普請御殿向表奥惣絵図」（東京都立中央図書館特別文庫室蔵、六一六一）である。⁽⁴³⁾弘化度の御殿図と比較してみると、基本構造は変わらないものの、簡略化された様子がうかがえる。その詳細については、今後の課題にしておきたい。

おわりに

將軍の生活空間については、八代將軍吉宗が享保一二年に休息所を新築して以降、御座之間の右に御休息と御小座敷、御座之間の下に能舞台を設けるといふ基本構造は変わらなかったが、一二代將軍家慶は、火災で焼失した本丸御殿を弘化二年に再建した際、御小座敷の奥に、楓之間や双飛亭、さらには御用之間という隠し部屋を設けた。ことに御用之間は、將軍が自ら政務を扱う場所であり、ここで判物や御墨付に花押を書いたり、小性頭取に朱印を押させたりしたという。

一方、將軍側近役の詰所空間については、「奥」の長官である御側御用取次の執務室の変化が注目される。吉宗時代は、前代の側用人を廃止し、その部屋を御用取次の部屋に改めたが、家重時代には側用人を再置し、御用取次の部屋を側用人の執務室とした。そして御用取次の部屋は、書物部屋を廃止して設置した。この変化により、「奥」の入口近くに平御側、その奥に側用人、そのさらに奥に御用取次の部屋というように、後代に設けられた政務補佐役ほど、「奥」の深部に執務室を与えられた。その結果として、御用取次の部屋は、「奥」の中心部に設けられることになったのである。

こうした「奥」の空間構造の変化を集約した本丸御殿図が、一二代將軍家慶時代の「（御本丸中奥）〔奥〕絵図」（東京都立中央図書館特別文庫室蔵）といえよう。⁽⁴⁴⁾

註

- (1) 『徳川林政史研究所「研究紀要」第二十七号(一九九三年)』。
- (2) 「元禄時代の江戸城本丸御殿図再論」(『徳川林政史研究所「研究紀要」第五十六号(二〇〇二年)』、「家宣・家継時代の江戸城本丸御殿図再論」(『徳川林政史研究所「研究紀要」第五十七号(二〇〇三年)』、以下「五七号所収論文」と略す)。
- (3) 『東京市史稿』皇城篇第二(東京市役所、一九二二年)六一〜六二五頁。
- (4) 『新訂寛政重修諸家譜』(統群書類従完成会、一九八五年)第二〇、三五四頁。
- (5) 深井雅海『江戸城御殿の構造と儀礼の研究―空間に示される権威と秩序』(吉川弘文館、二〇二一年)一一〇頁。
- (6) 深井雅海『徳川將軍政治権力の研究』(吉川弘文館、一九九一年)三四五頁。
- (7) 註(5)の深井著書一一一頁。
- (8) 註(5)の深井著書一一四頁の註(14)。
- (9) 註(5)に同じ。
- (10) 東京大学史料編纂所『大日本近世史料 柳営補任』一卷(東京大学出版会、一九六三年)一〇二〜一〇四頁。
- (11) 深井雅海・藤實久美子編『江戸幕府役職武鑑編年集成』二三卷(東洋書林、一九九七年)一五六頁。
- (12) 同右、二〇〇頁。
- (13) 註(10)に同じ。
- (14) 註(6)の深井著書二七五〜二八二頁。
- (15) 『徳川実紀』第九篇(吉川弘文館、一九六六年)二三六頁。
- (16) 大岡忠光は、宝暦六年五月二日に側用人に任命された(同右書、六六一頁)。
- (17) 註(6)の深井著書、第一編第四章参照。
- (18) 『随筆百花苑』第九卷(中央公論社、一九八一年)一三四頁。
- (19) 註(11)の『江戸幕府役職武鑑編年集成』一三卷一六四〜一六六頁。
- (20) 『断家譜』第二卷(統群書類従完成会、一九六八年)一六八〜一六九頁。註(11)の『江戸幕府役職武鑑編年集成』一三卷一八五頁。なお数田助次郎は、明和二年一二月に御休息御庭之者支配に就任し、同三年八月西丸・二丸山里預に転出してゐるので、この点からみても、この御殿図が明和三年前半の状況を示すものと推定できる。
- (21) 註(3)の『東京市史稿』皇城篇第二、七八七頁。
- (22) 『続徳川実紀』第二篇(吉川弘文館、一九六六年)五二〇・五三七頁。『東京市史稿』皇城篇第三(東京市役所、一九二二年)六五三〜八五三頁。
- (23) 小粥祐子「江戸城本丸御殿下御鈴廊下の新設時期について―江戸城本丸御殿平面図・間取図の収集と研究資源化に関する研究報告」(『東京大学史料編纂所研究紀要』第三〇号、二〇二〇年)。
- (24) 勿論、この絵図に記載されていないからといって、「新御鈴廊下」＝「下御鈴廊下」が享保期に作られなかったとはいえないが、小五郎の「表住居」に伴って新設されたとするならば、御鈴廊下を設ける理由を示す必要がある。
- (25) 註(5)の深井著書二七〜二八頁。
- (26) 美和信夫『江戸幕府職制の基礎的研究』(広池学園出版部、一九九一年)三九〇〜三九一、四四四〜四四六頁。
- (27) 註(26)の美和著書三八二〜三八三、三八五、三八八頁。
- (28) 註(10)の『大日本近世史料 柳営補任』一卷一〇八・一一〇・一一二頁。深井雅海・藤實久美子編『江戸幕府役職武鑑編年集成』二八卷(東洋書林、一九九八年)九三頁。
- (29) 万延度のものでされる「江戸城御本丸表中奥御殿向並御やぐら御多門共惣地絵図(万延度)」(東京都立中央図書館特別文庫室蔵、六一・六一三)では、図13⑥の区画の真上の二階部分に「御小性頭取部屋」、その左の「御廊下」から「御小納戸衆西部屋」のあたりの区画の二階に「御小納戸頭取衆」とあり、同⑥の左側の「御小性衆湯殿」「夜具部屋」の記載がある区画の二階部分に「御小性衆部屋」とあることから、図13の家慶期にも同様の構造になっていた可能性が高い。
- (30) 註(28)の『江戸幕府役職武鑑編年集成』二八卷一〇一〜一〇六頁。
- (31) 註(29)と同じく、「江戸城御本丸表中奥御殿向並御やぐら御多門共惣地絵図(万延度)」では、図13の⑧「庭方」の上にある「行燈へや」一帯の区画の二階に、「奥御医師部屋」が二部屋確認される。
- (32) 註(28)の『江戸幕府役職武鑑編年集成』二八卷一三三頁。

(33) 註(22)の『東京市史稿』皇城篇第三、七〇九～七一二頁。

(34) 平井聖監修・伊東龍一著『城郭・侍屋敷古図集成 江戸城Ⅰ(城郭)』(至文堂、一九九二年)二六〇～二七頁の図35。

(35) 村井益男責任編集『日本名城集成 江戸城』(小学館、一九八六年)所収の「東京都立中央図書館所蔵江戸城関係史料一覧」では、この図は弘化度の御殿図に分類されている。実際この図には、新たに弘化二年五月に出来た「双飛亭」本稿図16の(19)が見えることから、同年度の御殿図とみて間違いないものと思われる(註(34)の伊東著書「江戸城の作事と各図解説」の「弘化度」図35の解説「二六八頁・二七七頁の注15」参照)。

(36) 松平春嶽全集編纂刊行会編『松平春嶽全集』一卷(原書房復刻版、一九七三年)四六六～四六七頁。

(37) 双飛亭が弘化二年五月に出来た(註(35)参照)すると、これらの部屋は、將軍家慶が新築なった本丸御殿に移徙した同年二月二八日以降に増築された可能性が高い。

(38) 永島今四郎・太田賛雄『千代田城大奥』下巻(岡崎屋書店、一九〇一年)「千代田城大奥付録」七～八頁。なおこの部分は、小納戸・小納戸頭取・目付・外国奉行・御側御用取次などを歴任した旧幕臣が「聞くがまゝに筆録」したものとい

う。ただし管見の限り、これらの役職をすべて歴任した人物はみあたらない。職歴が近い人物としては、一四代將軍家茂の御用取次を務めた大久保忠寛があげられる。彼は『柳宮補任』によると、小納戸・目付・外国奉行は務めているものの、小納戸頭取は務めていない。

(39) 旧事諮問会編・進士慶幹校注『旧事諮問録―江戸幕府役人の証言―』(上)(岩波文庫、一九八六年)三七頁。

(40) 註(38)『千代田城大奥』下巻の「千代田城大奥付録」九頁。

(41) 註(6)の深井著書三〇七・三四九頁。

(42) 小性・奥医師の部屋については、註(29)・註(31)で指摘したごとく、二階に設けられたものと思われる。

(43) 註(36)の『松平春嶽全集』一卷四六二頁。

(44) 『続徳川実紀』第三篇(吉川弘文館、一九六六年)六三四・八二五頁。註(22)の『東京市史稿』皇城篇第三、一一七四～一二一七頁。

(45) 註(34)の伊東著書一七一頁の図50。

(46) ただし、この図には二階部分は記載されていない。この点の分析についても今後の課題にしたい。





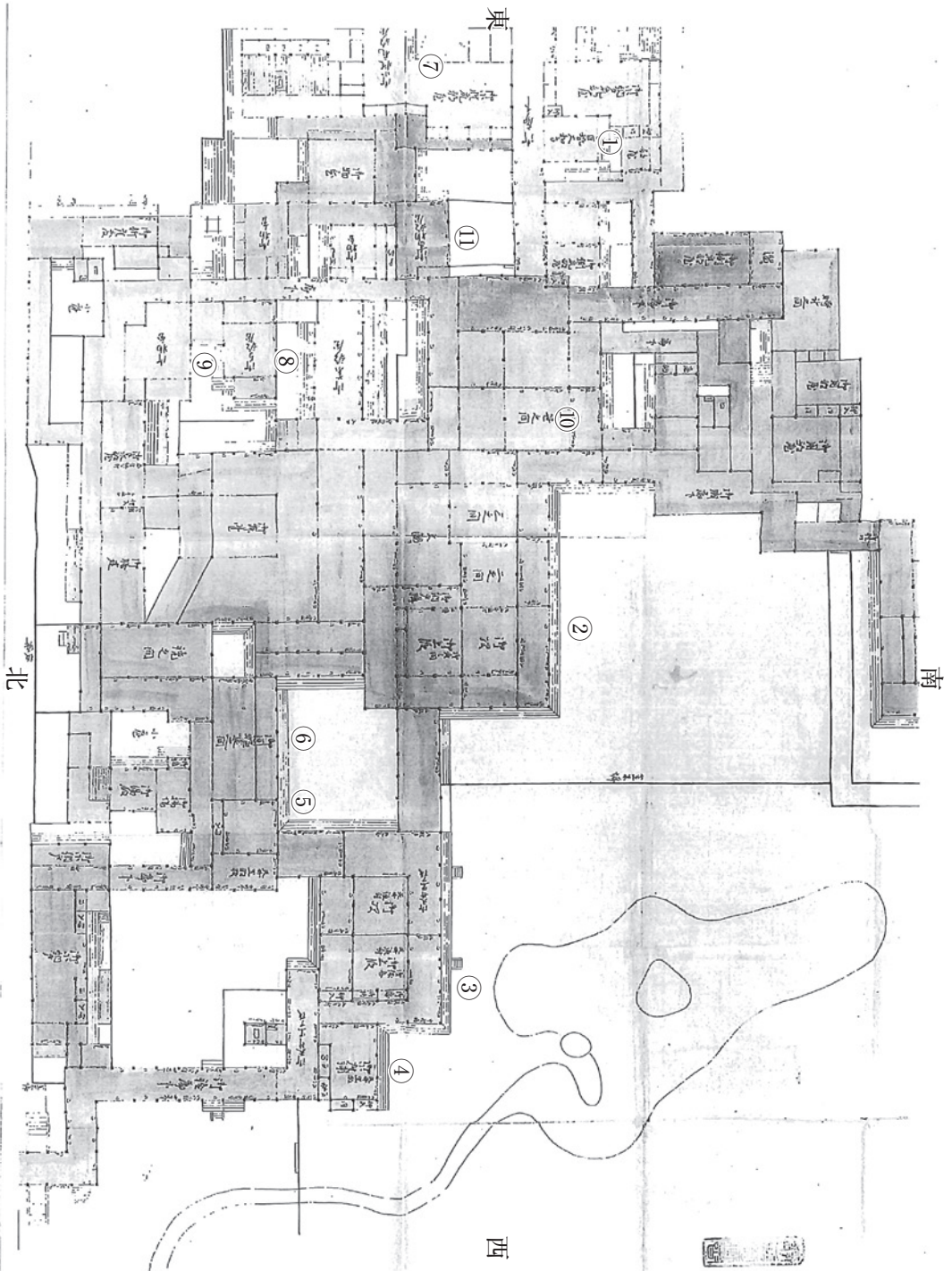


図2-1 「江戸城奥向絵図」

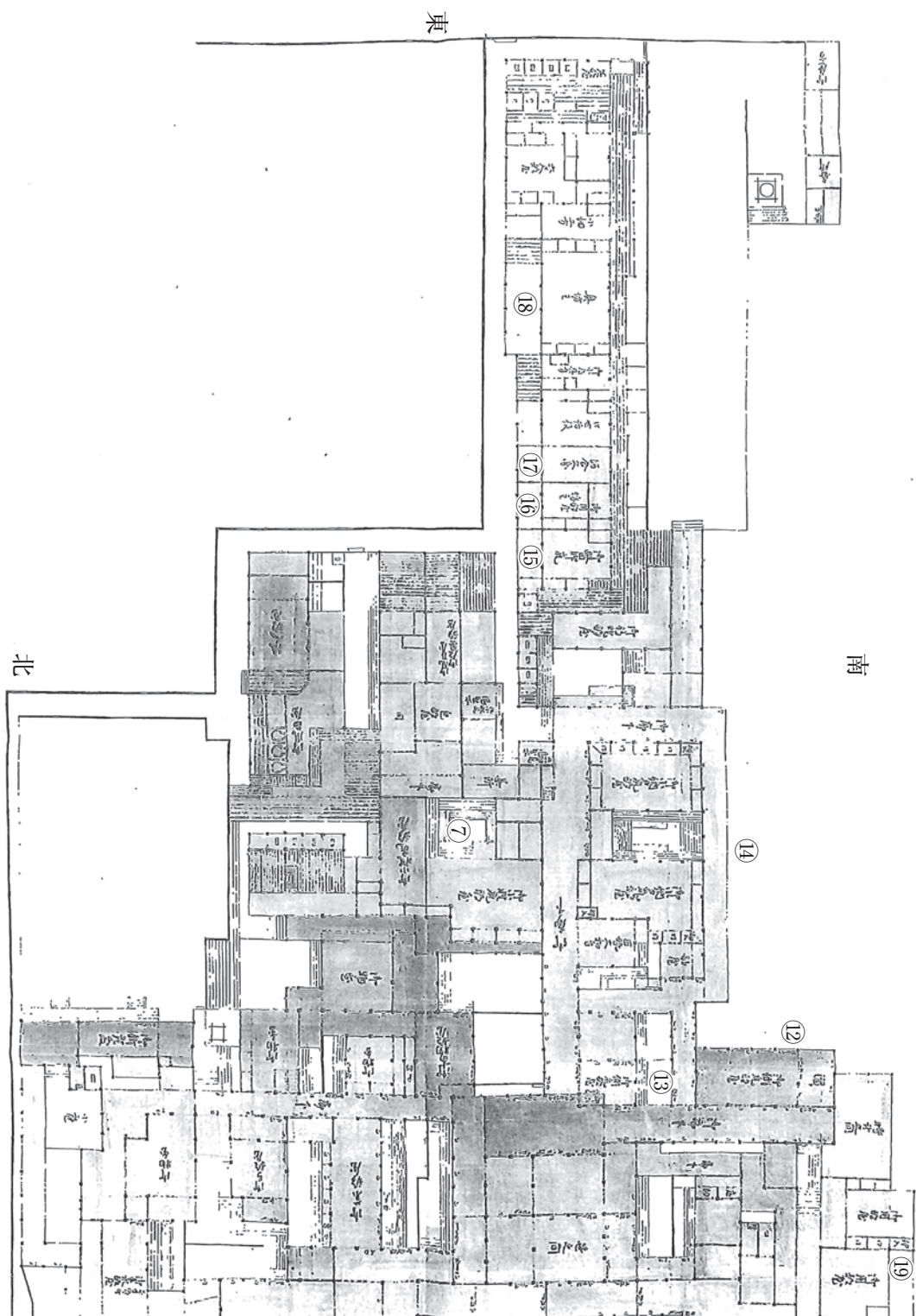
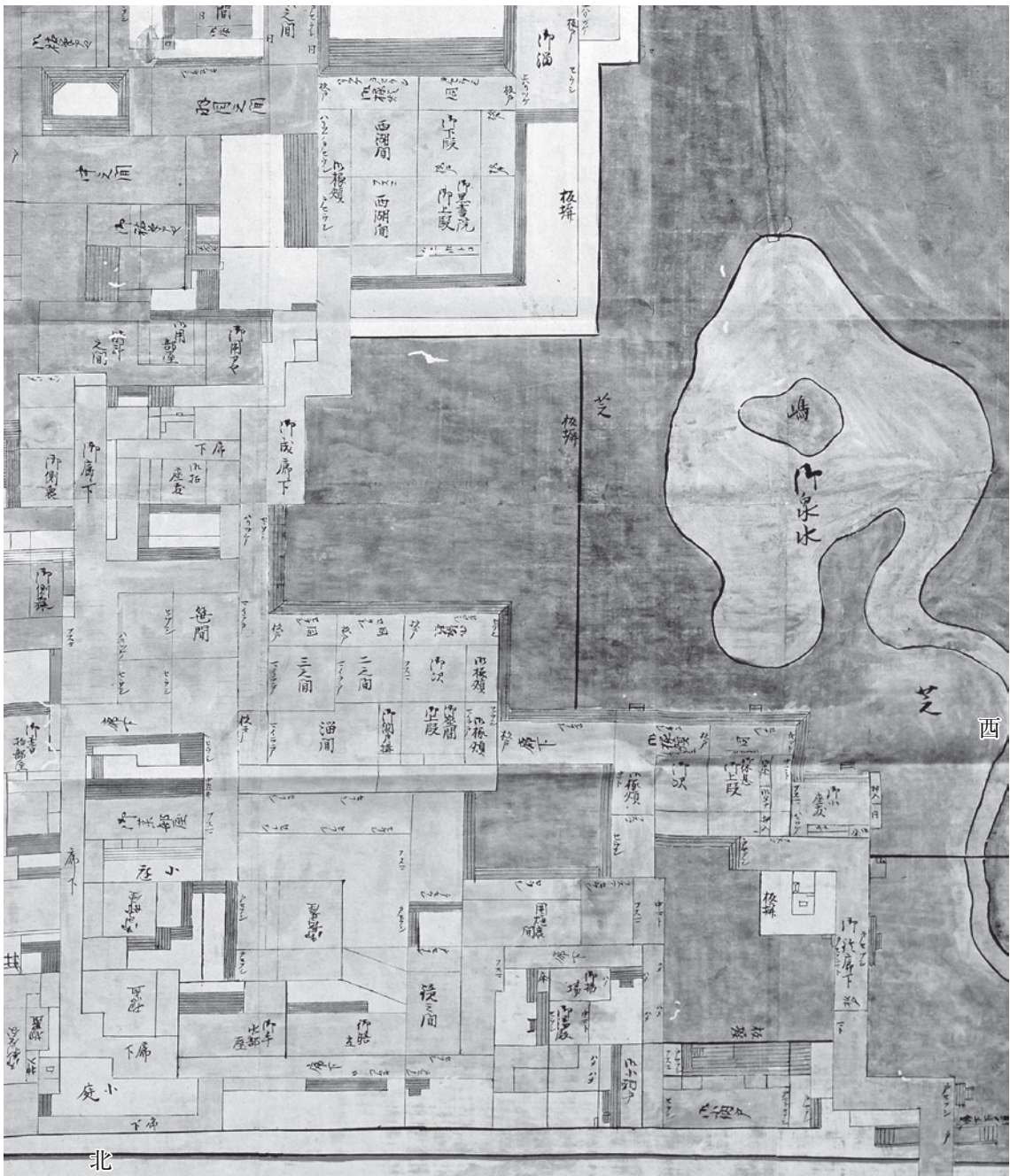


図 2-2 「江戸城奥向総図」



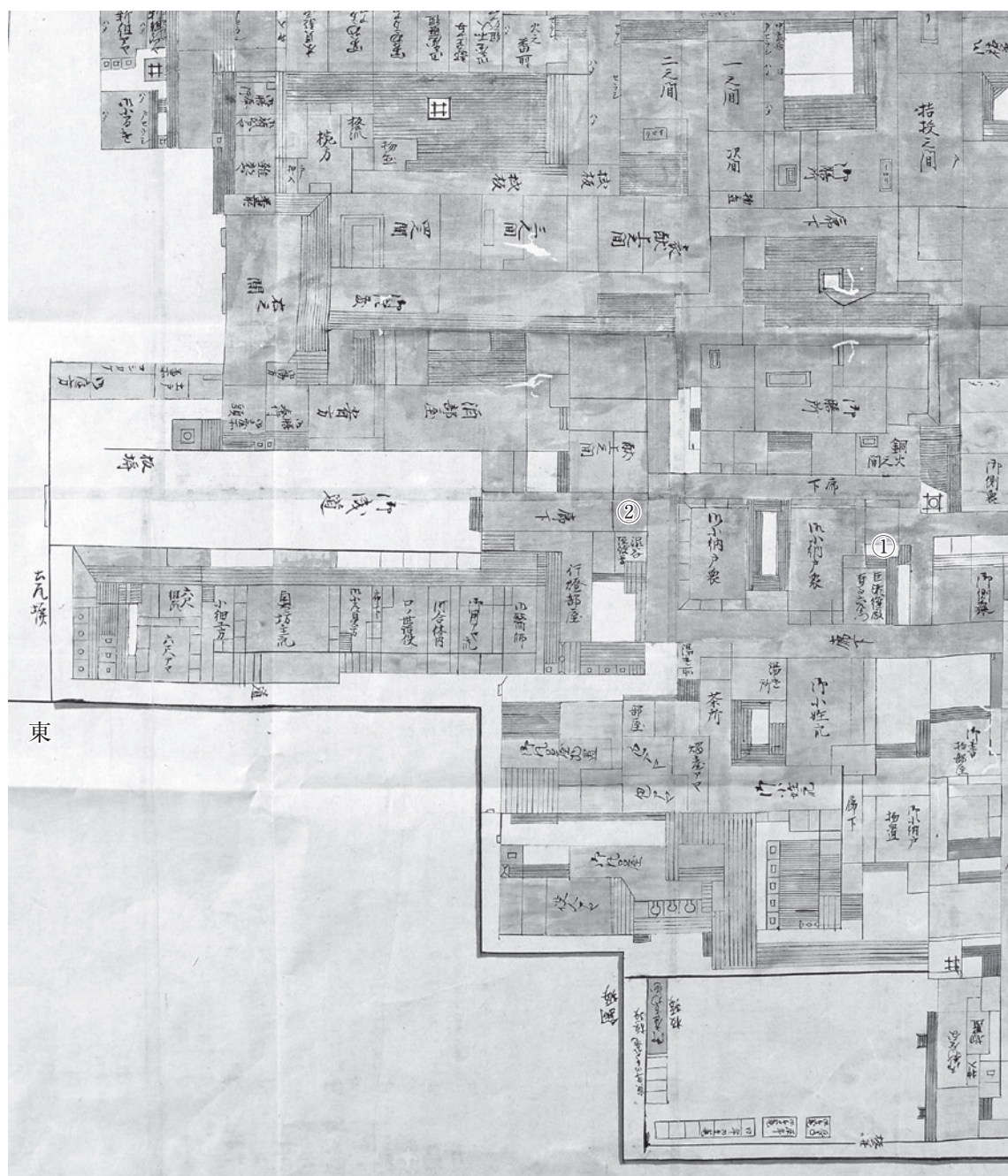


図3 「東武御本丸絵図」



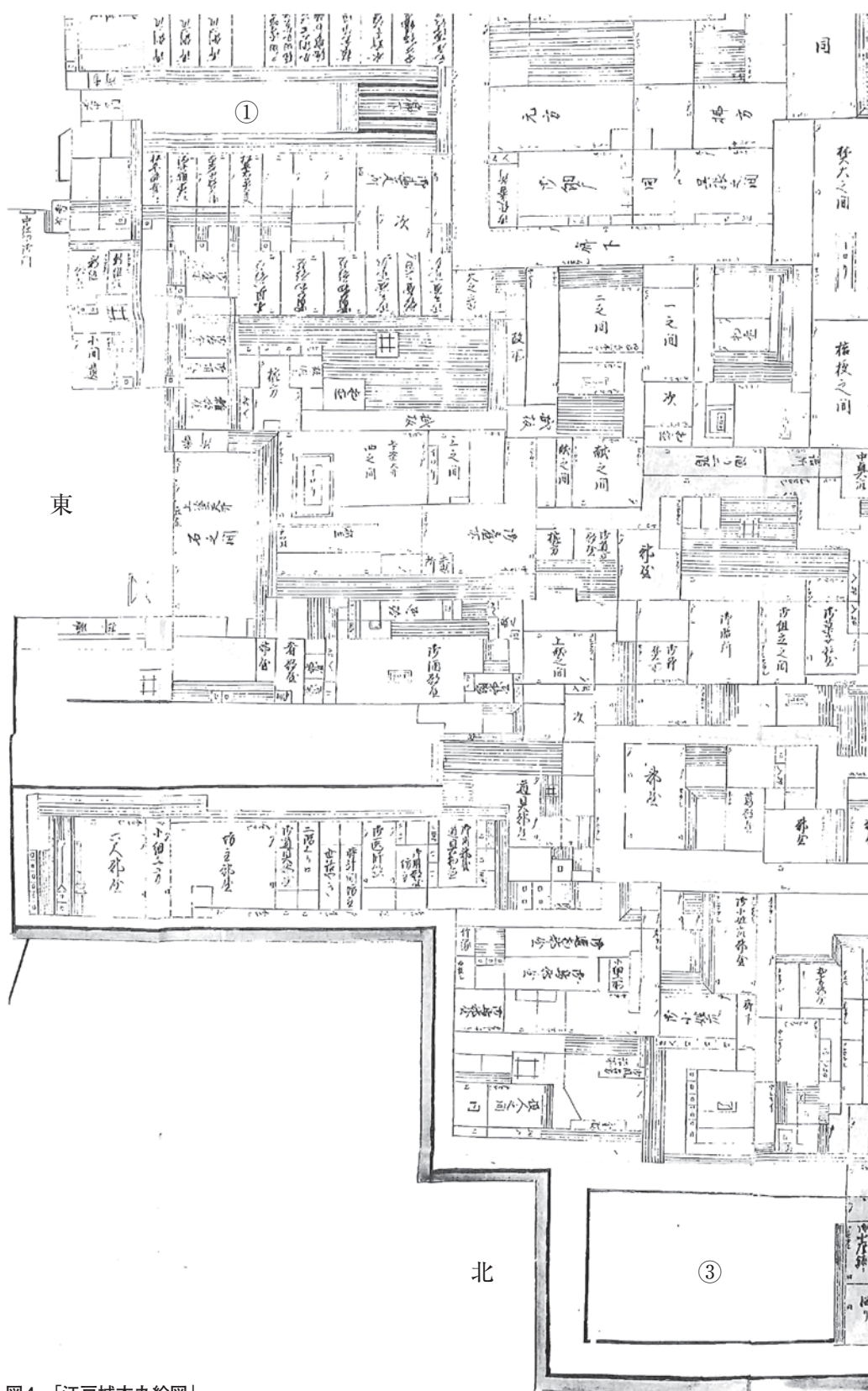
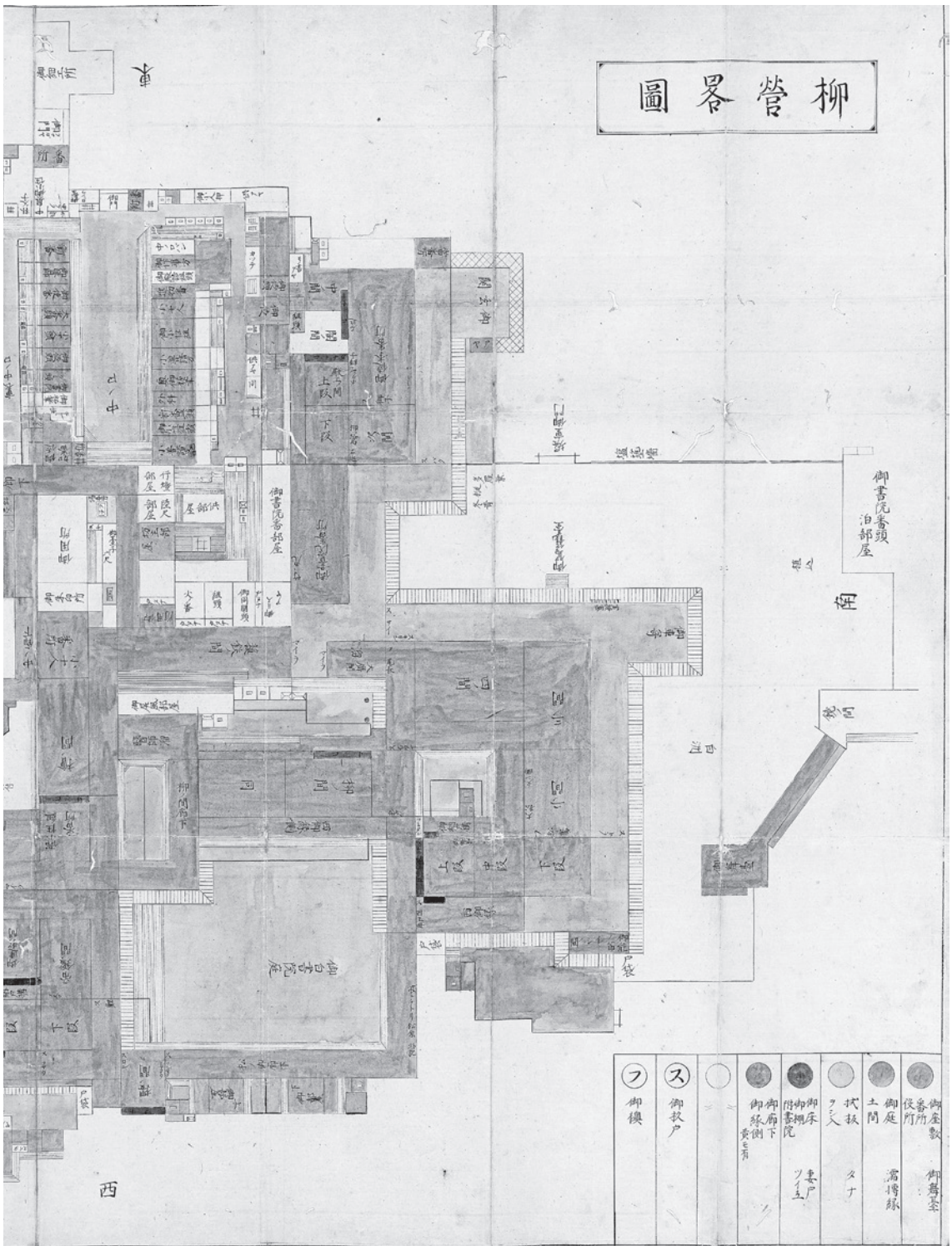


図4 「江戸城本丸絵図」

柳營畧圖



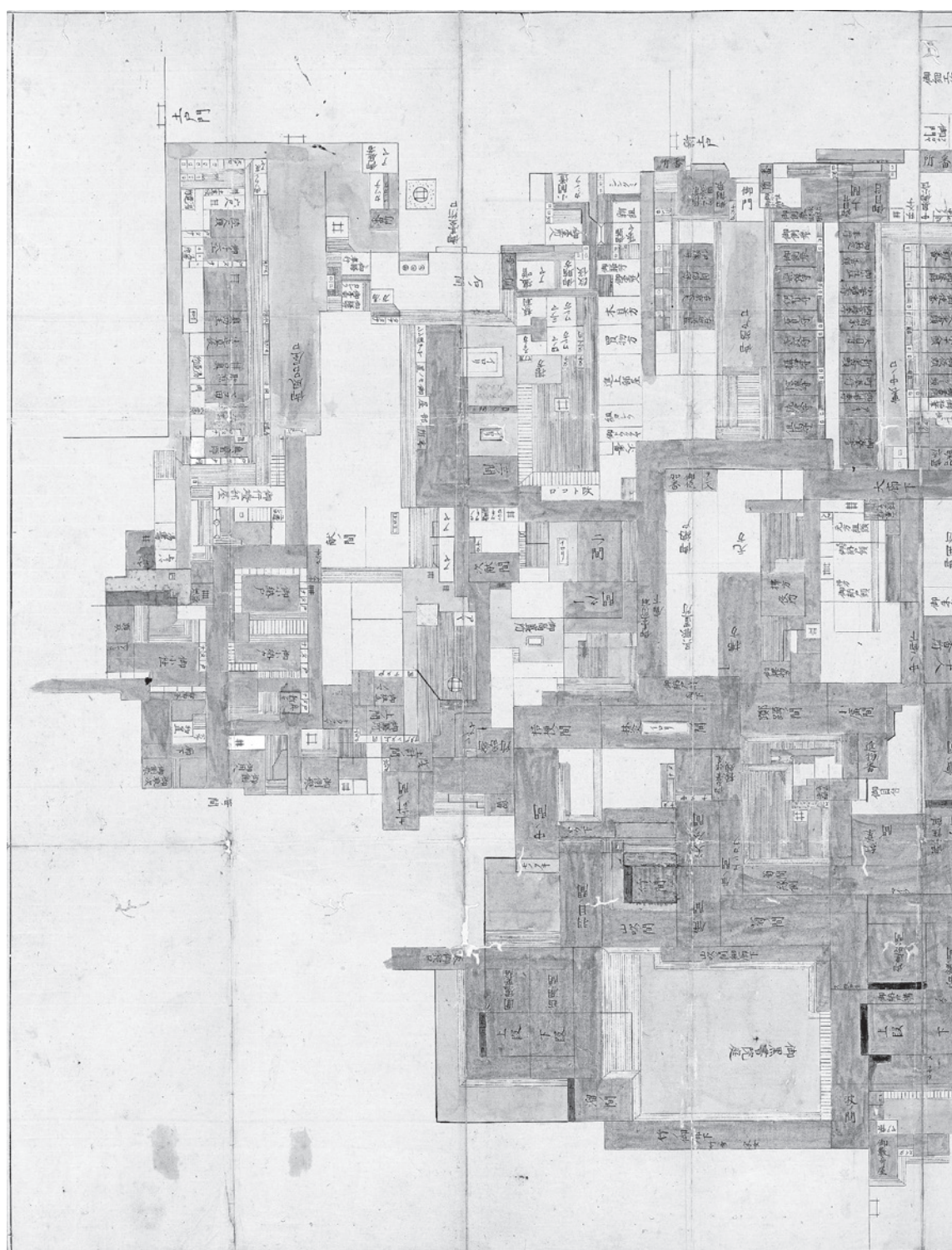


図5 「柳営略図」

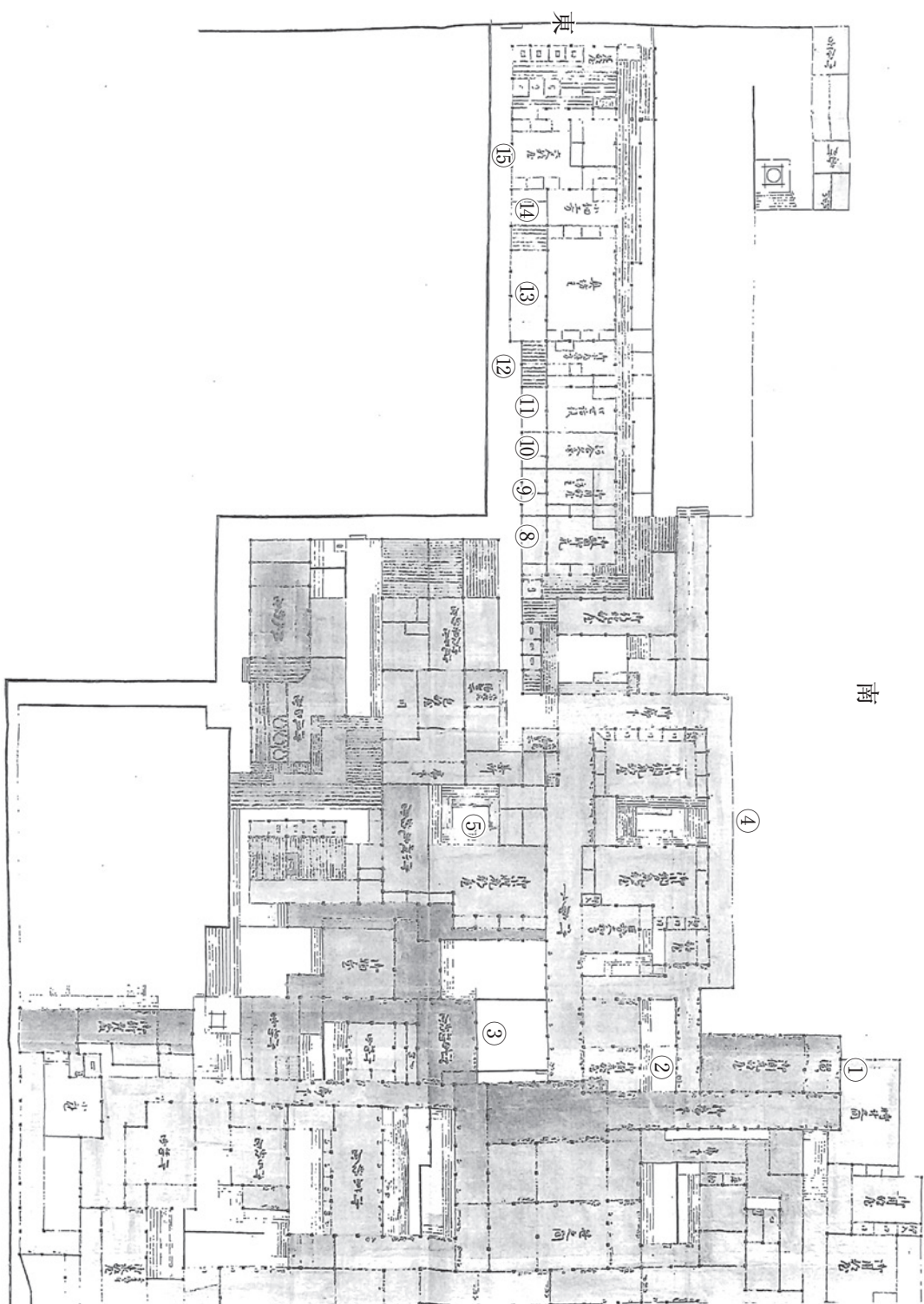
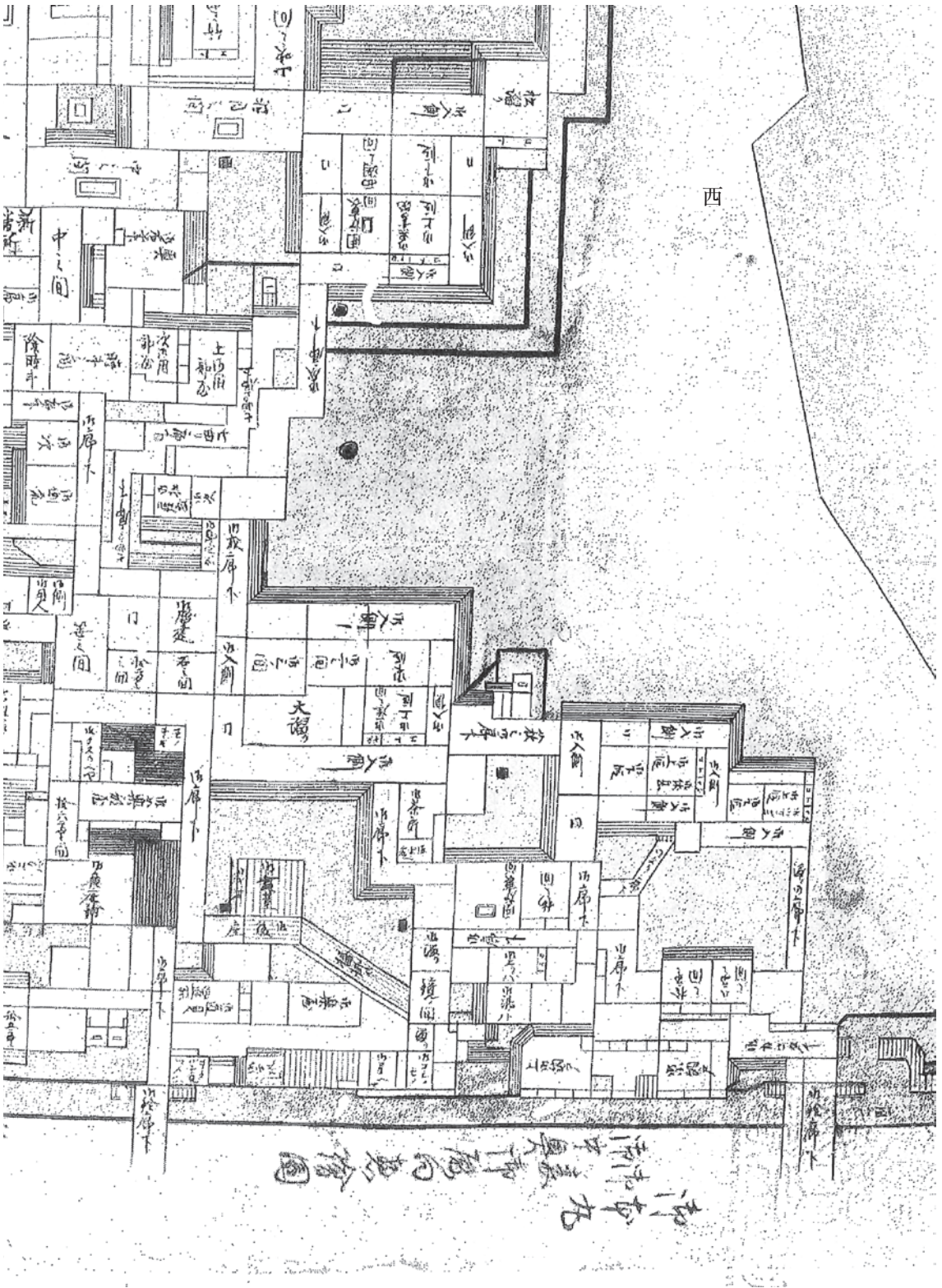


図7 「江戸城奥向絵図」





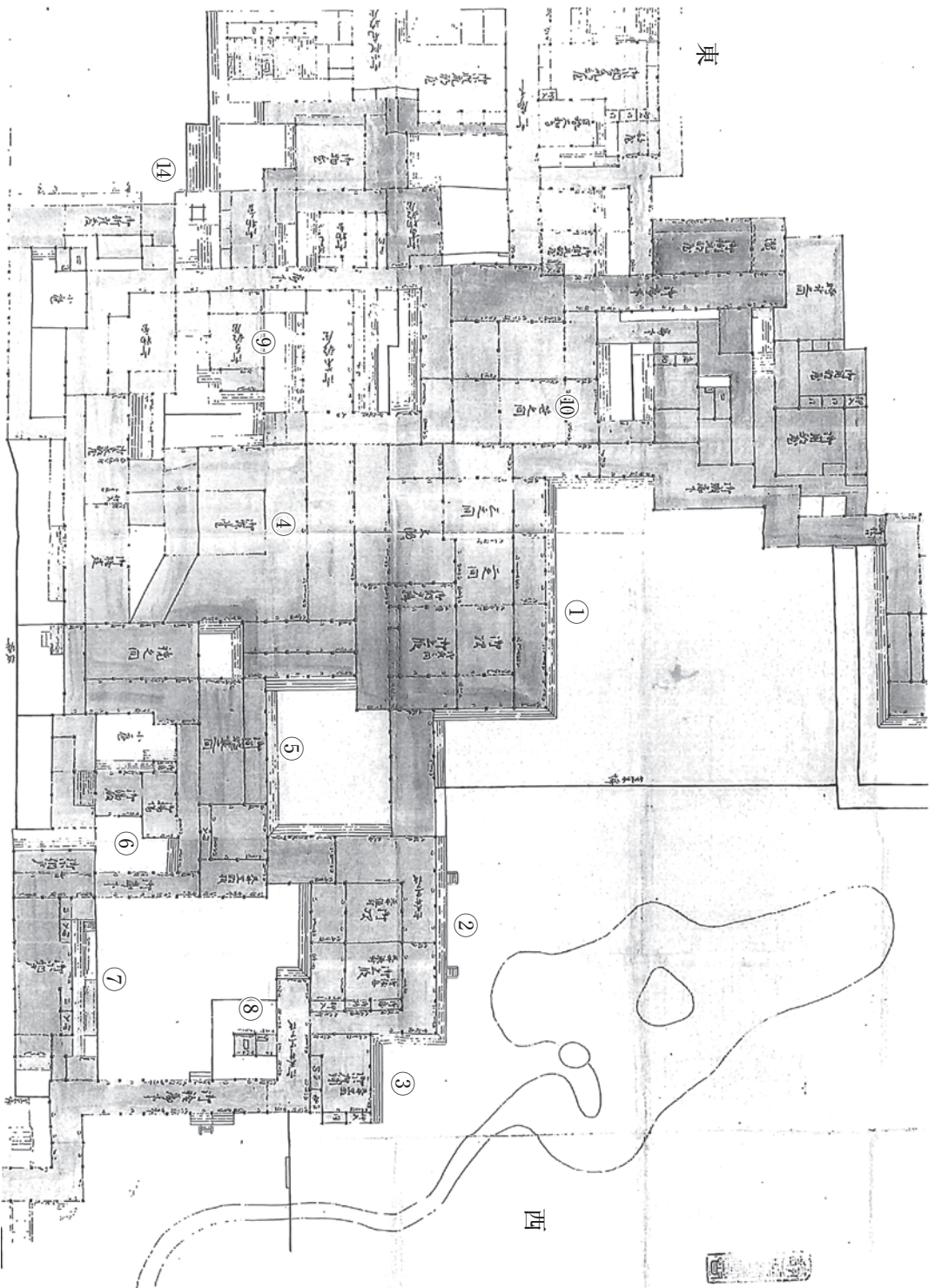


図10 「江戸城奥回線図」

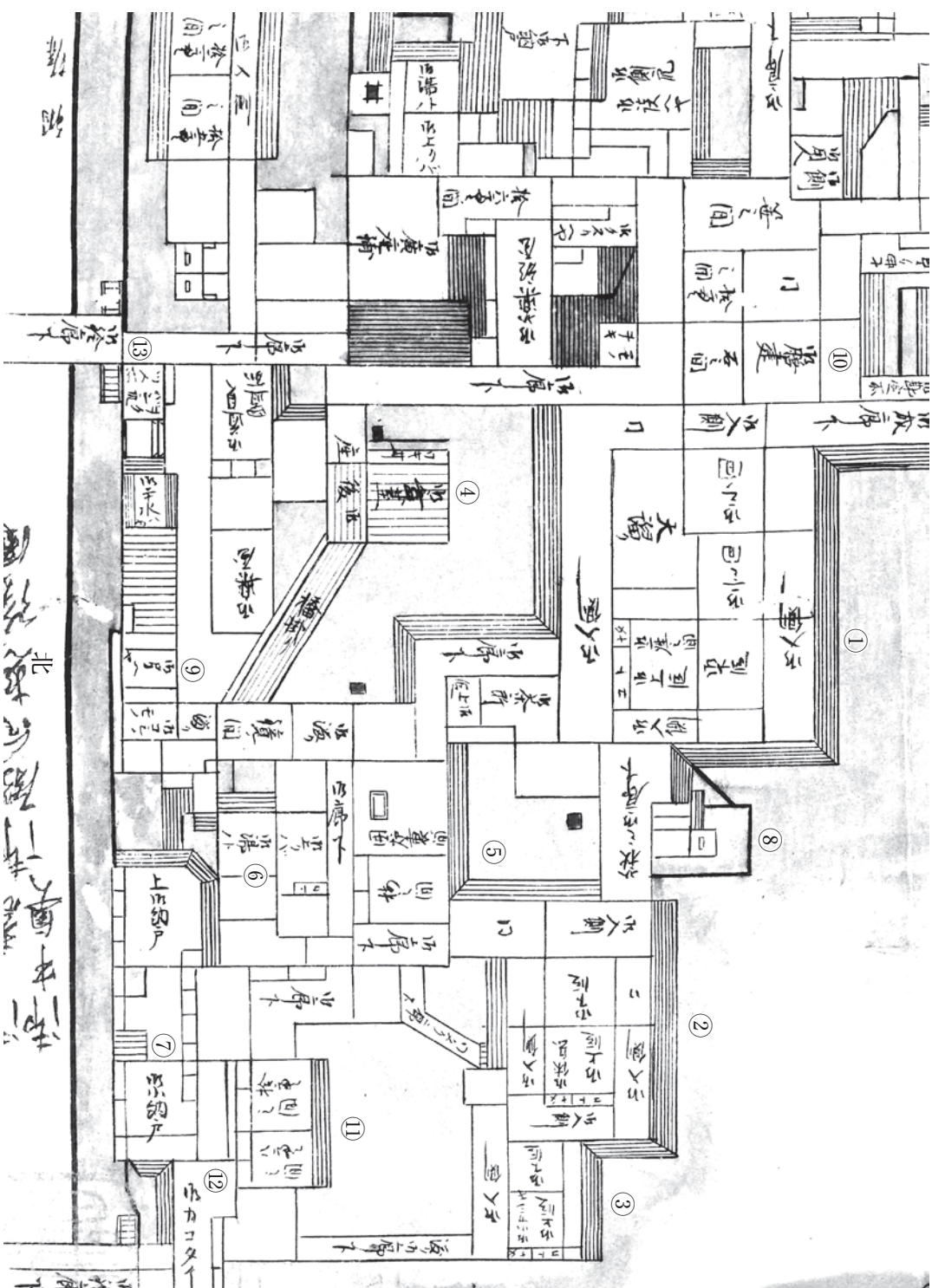


図11 江戸城御本丸御表側中奥御殿向惣絵図

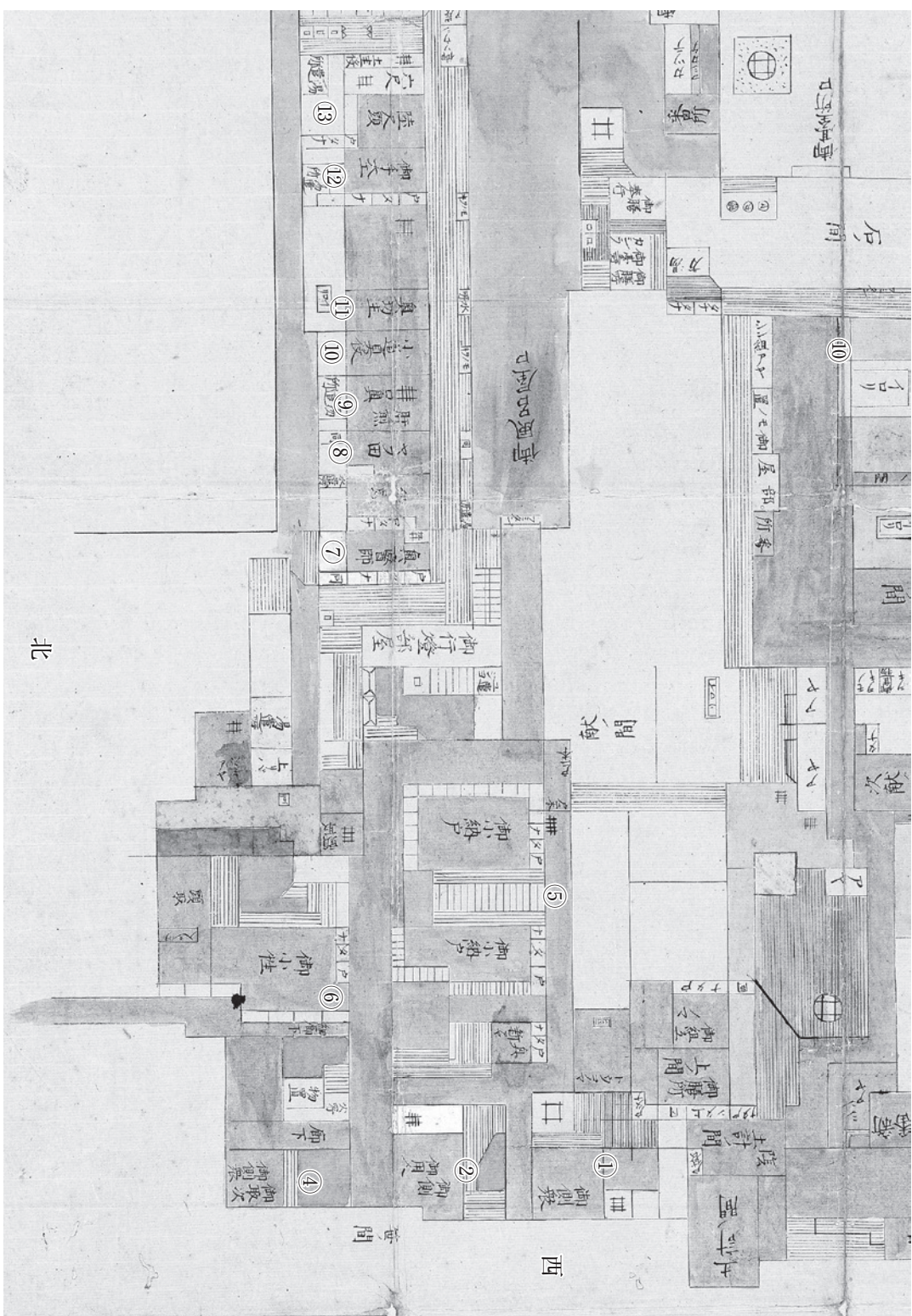


図 12 「柳宮略図」

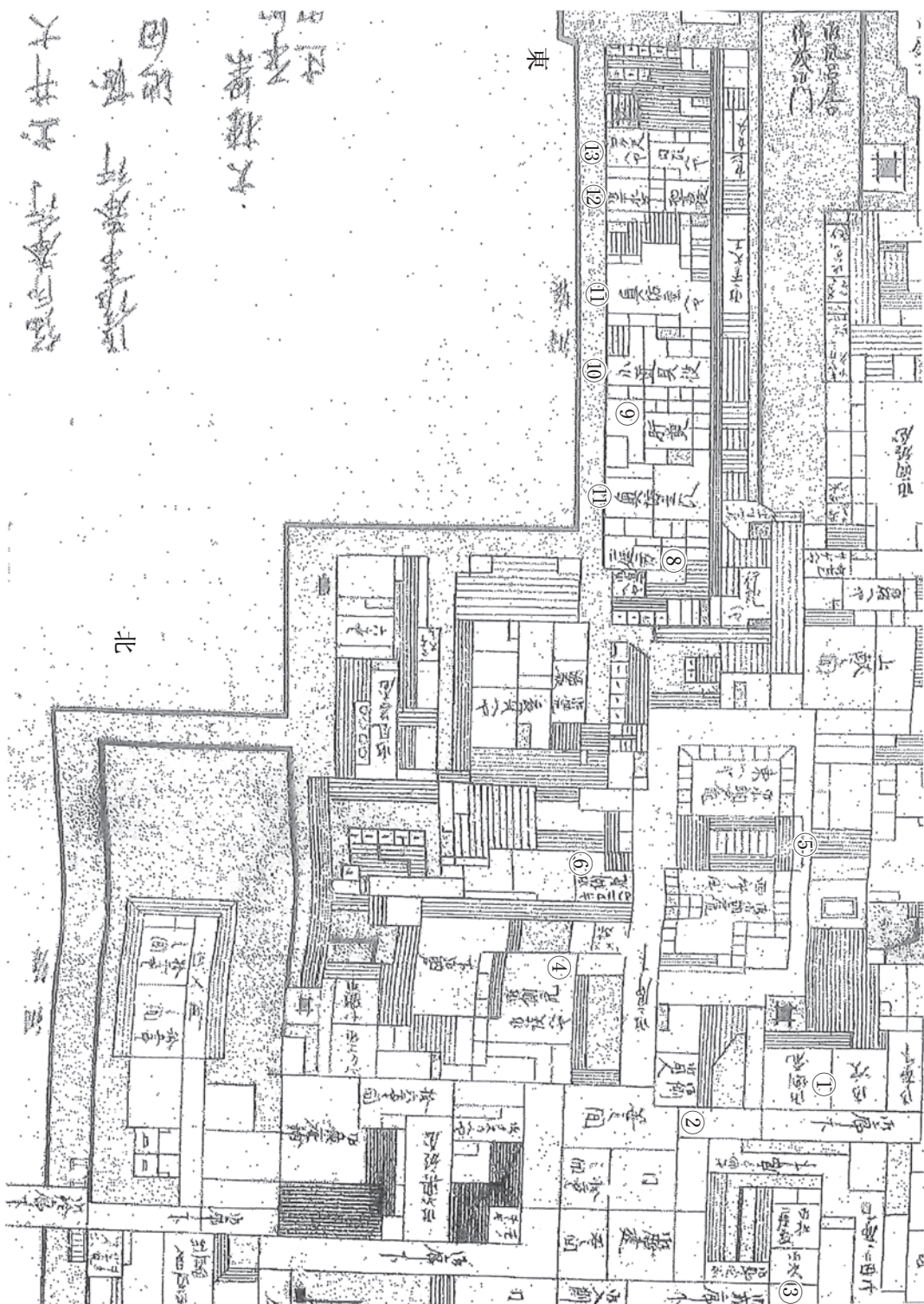
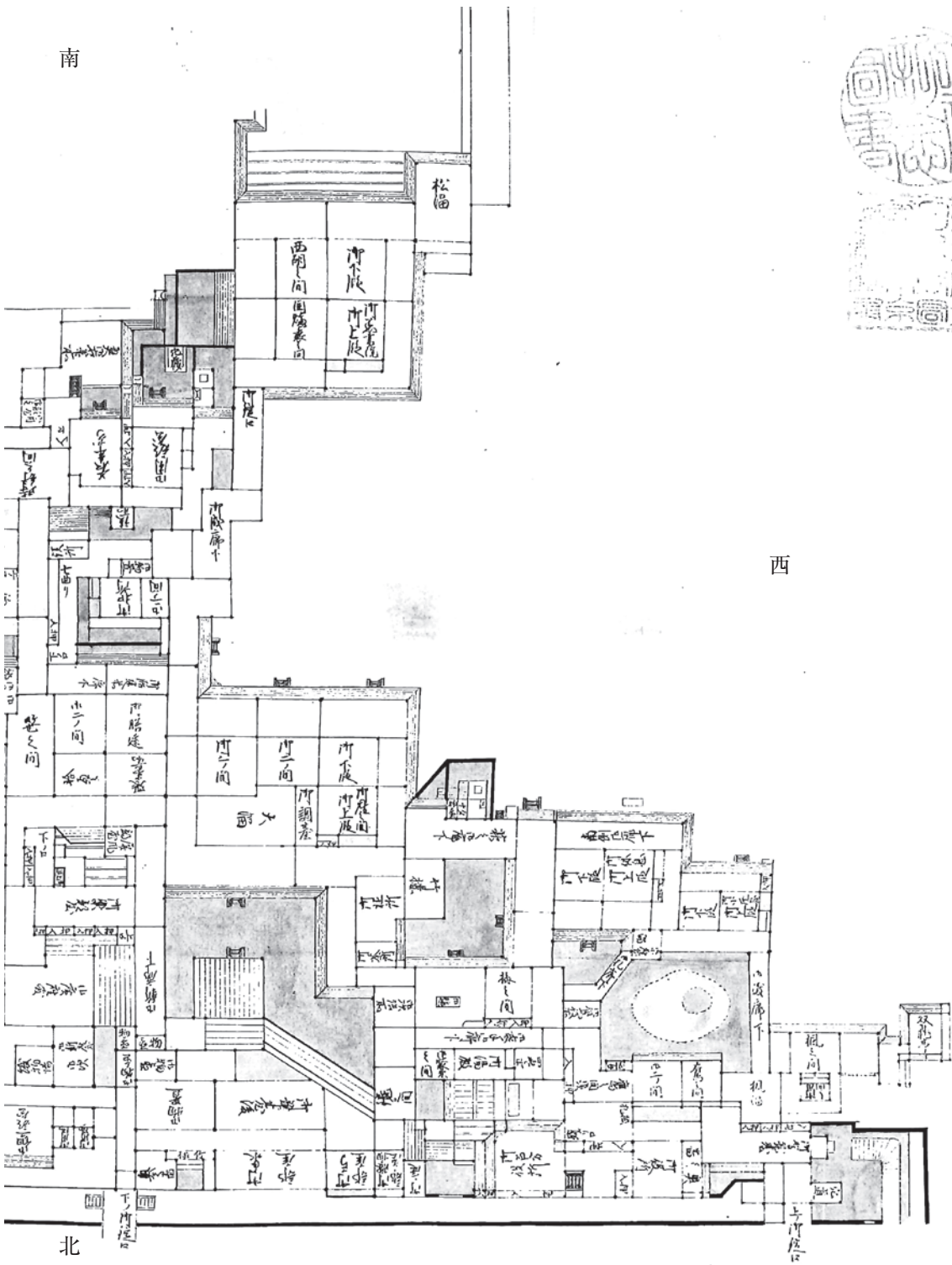
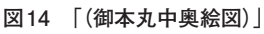


図13 江戸城御本丸御表御中奥御殿向惣絵図





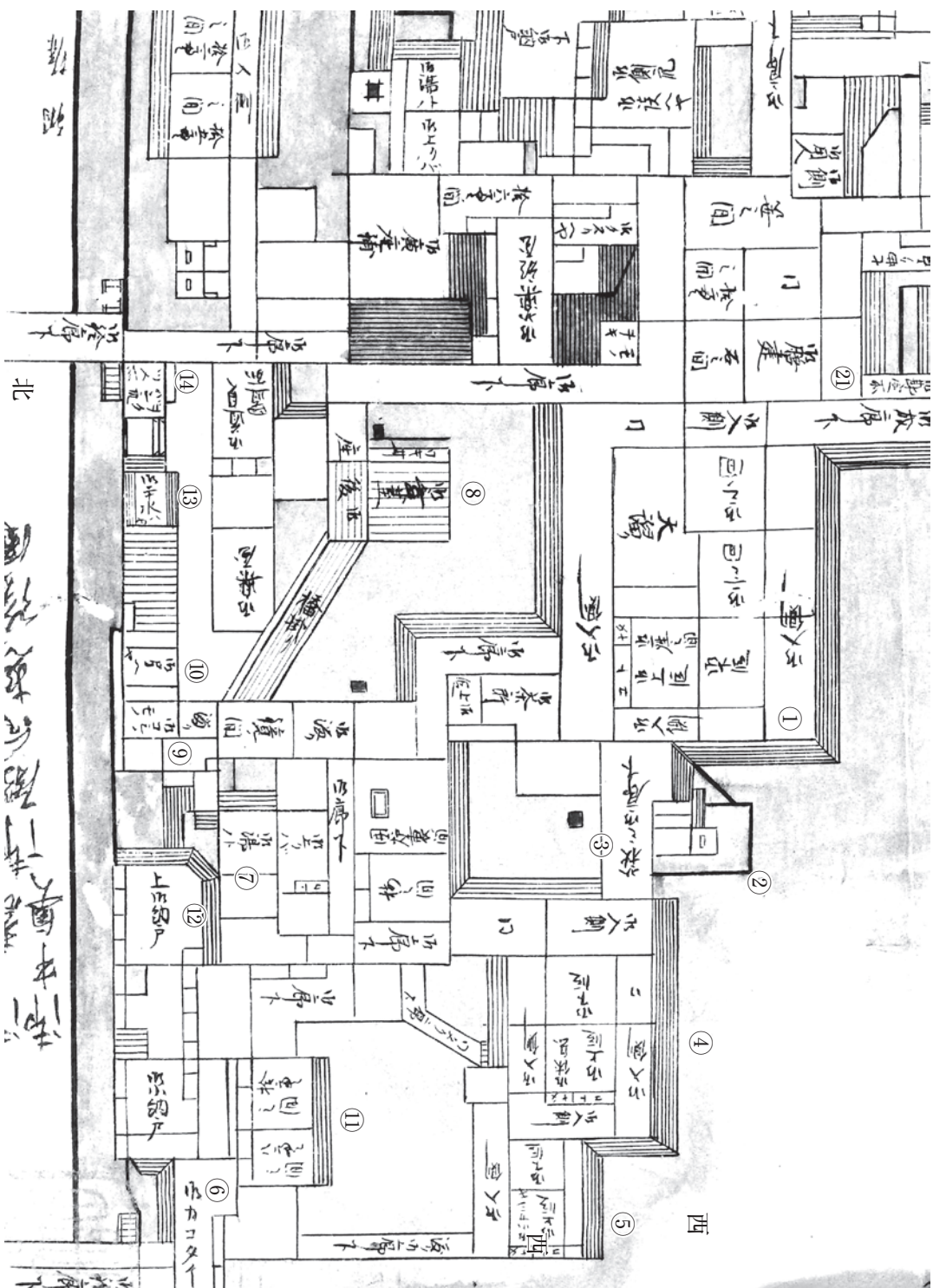


図 15 「江戸城御本丸御表側中奥殿向惣絵図」

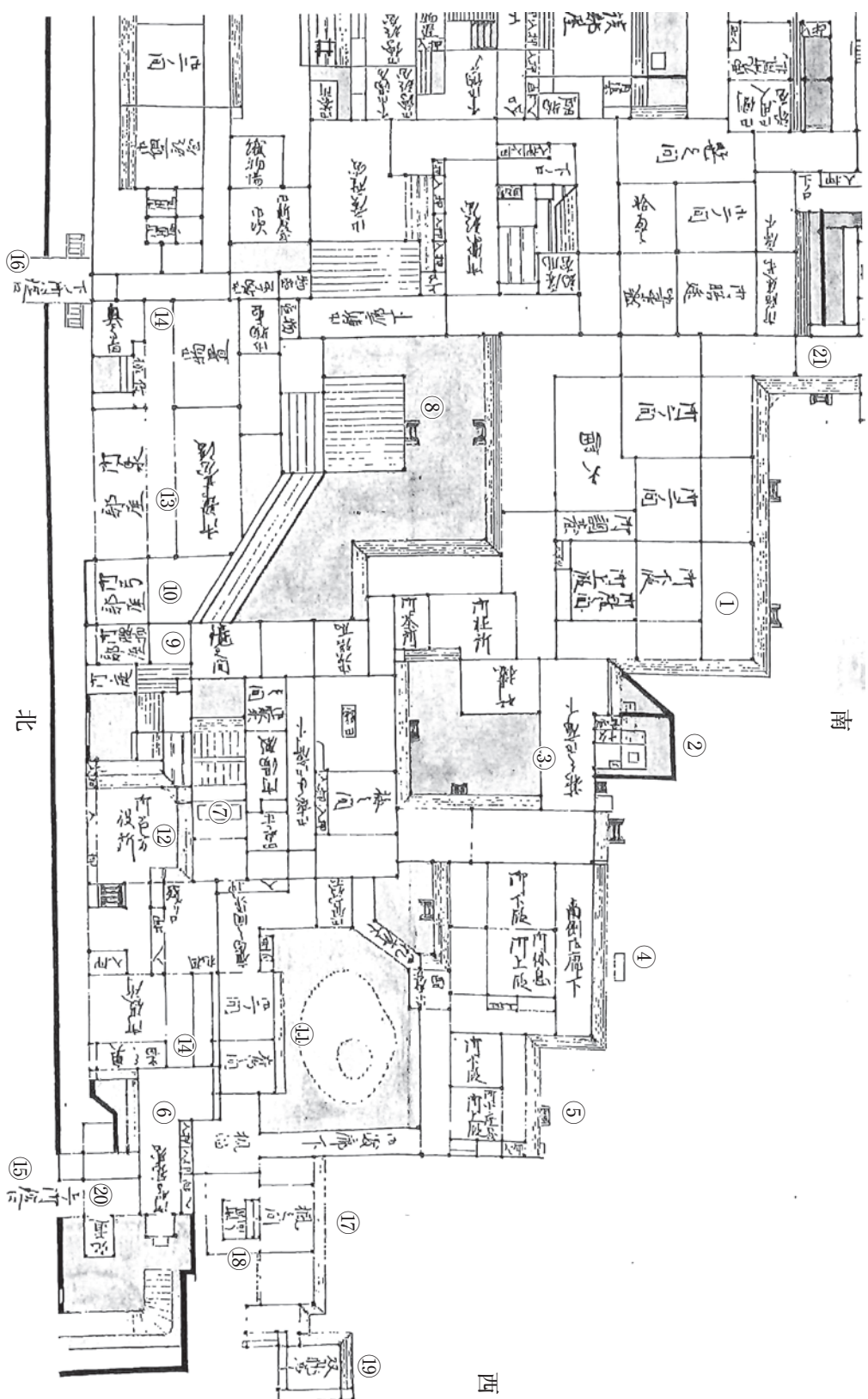


図 16 「御本丸中奥絵図」

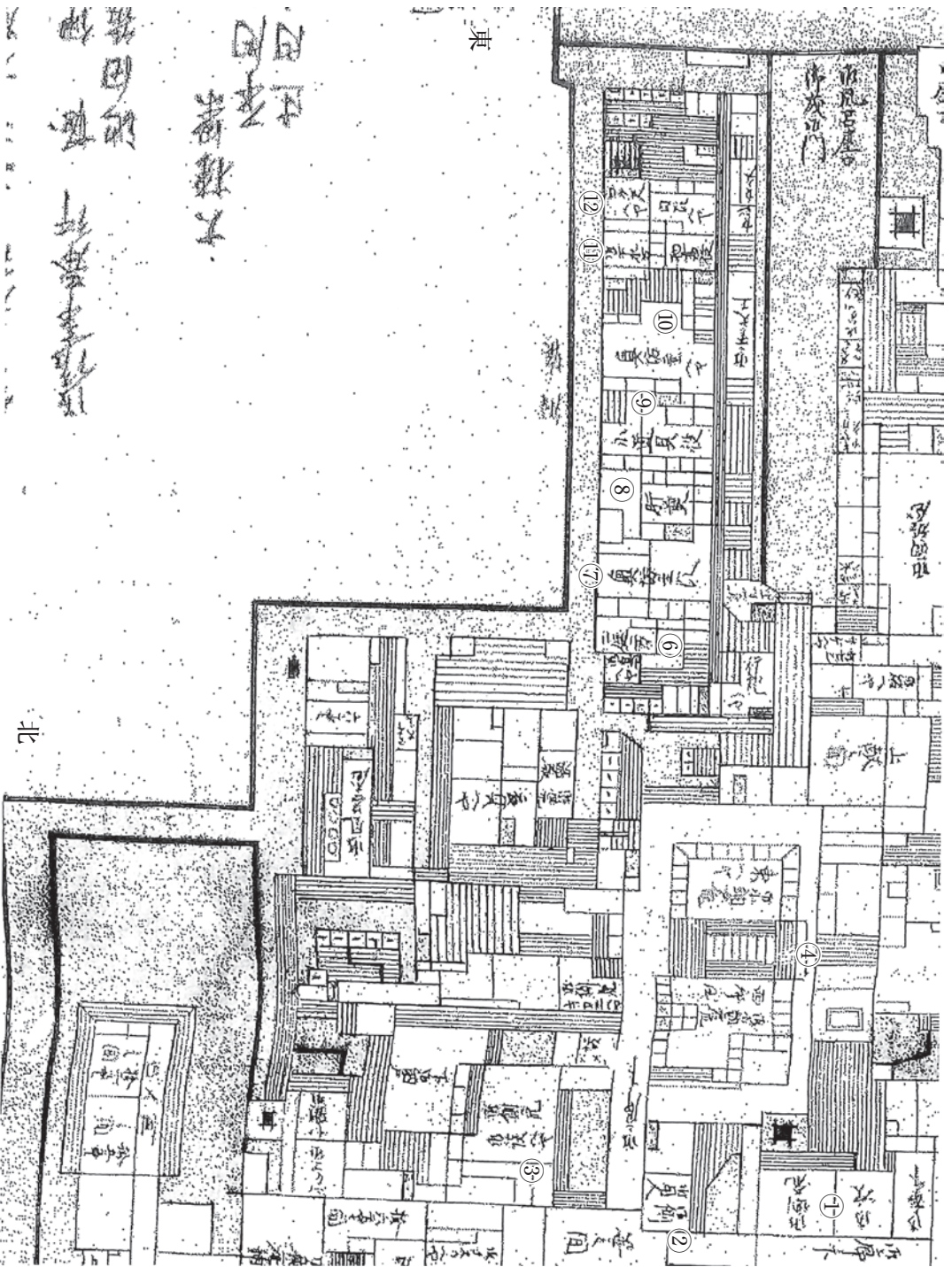


図17 「江戸城御本丸御表御中奥御殿向惣絵図」

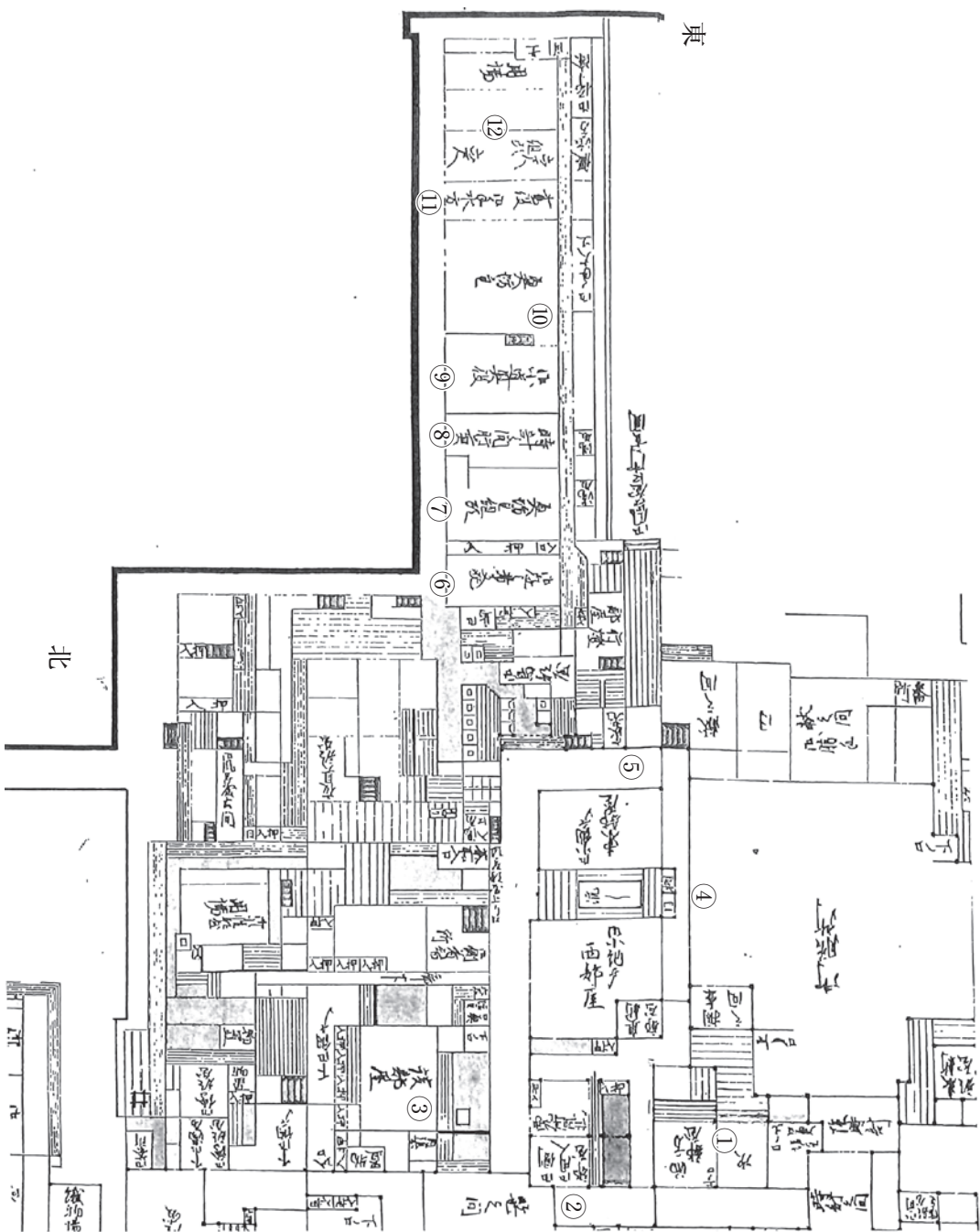


図 18 「御本丸中興絵図」

